

シェイクスピアの女たち・神戸女学院の学生たち

金 城 盛 紀

Summary

Shakespeare's Women/Kobe College Students

Seiki Kinjo

Women in Shakespeare's tragedies are more often than not victimized by men. Ophelia, Desdemona, Cordelia—these are a few that immediately come to mind. Women in comedies, however, are blessed. Graced with rare qualities and good fortune, they change the world dominated by men. If there are heroes in comedies, they are women.

Comic women bring about spring in the world of winter. Their love is not only reciprocated by the men they love but also it becomes the epicenter of love and harmony in a given community. Beatrice in *Much Ado About Nothing*, Rosalind in *As You Like It*, Viola in *Twelfth Night* are outstanding examples of this phenomenon with their uniquely individualized personalities and roles.

Saving the life of her husband's friend with her wisdom and wealth, the beautiful Portia in *The Merchant of Venice* further enhances her beauty and charm as a woman and wife. Though a supporting character, Paulina in *The Winter's Tale*, is indispensable in turning the long winter into spring of rebirth and harmony. At the time when women's virtues were silence and obedience, these women in Shakespeare's comedies assert themselves with both verbal eloquence and courageous actions. The power thus yielded is a natural overflow of their desire to help others, an integral element of their sense of love and duty.

It has been my great happiness to encounter a number of students at Kobe College who reminded me of these shining women in Shakespeare. In a way they helped me understand these Shakespearean characters better, and on this occasion of my retirement from the College, I hope that students of this College will continue to foster love and peace with their given capability and love, however modest and limited the spheres they find themselves in.

新年おめでとうございます。皆さんよい年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

さて、私は同志社大学から神戸女学院大学へ参りましたときにも、この講堂で研究所主催の講演を行う機会を与えられました。ご紹介下さいましたのは当時の研究所所長で植物学者の矢野悟道先生でした。私は40歳を過ぎたばかりで、髪もふさふさ黒黒としていました。それから24年が過ぎました。そのときの演題は「シェイクスピアと自然」というものでした。この題目だけからみると、今はやっているネーチャー・ライティングを先取りして取り上げたかと思われるかも知れませんが、私にそんな先見の明があるはずもなく、衣服のファッションと同じで、大体、流行というものは私が気づいたときには、オールド・ファッションになっているのが常です。若かった私がお話しをしたのは、「自然を守れ」とか「自然が豊か」という意味の自然、すなわち山川草木、あるいは花鳥風月を第一義的に指す自然ではなく、そういう意味の自然も含めて、存在するあらゆるもの、つまりすべての被造物、万物の在り方をシェイクスピアはどう見たかということでした。このテーマを、『ハムレット』や『リヤ王』などいわゆる4大悲劇を例にひきながらお話をいたしました。秩序という概念を中心にすえたシェイクスピアの包括的世界観、そして人間観が話の中心になっていたと記憶しています。

私の耳に届いた反応はさまざまでした。自然の美しさで知られている岡田山に職を得て、いわゆる自然をテーマにしない話に失望した方がありました。思想史を講じておられたチャブレンの高道基先生には面白かったから活字にするようにとのお言葉をいただき喜んだものでした。この先生は私よりちょっと前に同志社から移って来られていて、このような先生が行かれる大学であれば悪くはないだろう、と神戸女学院大学のことをほとんど何も知らなかった私が判断する貴重な資料となられた先生であります。高道先生が本学を後にして遠い大学の学長として去って行かれてからもう10年以上なるとは思いますが、そのときに味わった喪失感はありません。

冒頭から話がそれましたが、24年前の私の講演は文章にはなっていません。私は就任早々に間違ったことを申したとは思っていませんが、シェイクスピアを教室でゆっくり読み、先達が残した無限ともいえる書物や論文の一部をひもとき、舞台やスクリーンの上で実際の作品を見て参りますと、興味や関心も変わってきたような気がします。

どう変わったかと言いますと、シェイクスピアについての抽象論よりも、この作家が作り出した人間そのものがもっと面白くなってました。包括的・総合的な人間観もさることながら、血肉をもった、感情をもった個々の登場人物がよりいっそう面白くなってきた訳であります。最近はやっているシェイクスピア研究の特徴は政治的であるということです。文学作品、お芝居が政治権力——パワー——との関係を中心として行う論議がここしばらく、特にアメリカで花盛りであります。そのお陰で、今まで見えなかった面に光りが与えられて見えるようになった功績も確かにあると思います。私自身も歴史劇『ヘンリー五世』についてそのような新しい

知見を援用して論文を書いたこともあります。しかし、多くの場合、シェイクスピアの作品では政治的葛藤や権力の争いは、そのような葛藤や争いそのものよりは、むしろそういった葛藤の当事者である人物の姿や人生のリアリティにこそ読者・観客は目を向けるべきである、葛藤はそのようなリアリティを写すための道具となっているのではないかという思いは禁じ得ません。少なくとも、葛藤はその当事者である人物と不可分の関係にあります。シェイクスピアは、しばしば矛盾する解釈も可能にするまさに包容力抜群の作家ですが、彼の関心の中心はやはり人間そのものであります。

さらに、私にとって最近登場人物のなかでも女性が面白い。現実の人間の姿に絶望的な幻滅を覚えてハムレットは友人たちに「人間なんて面白くない」と言いますが、ハムレットは人間のことを、当時の語法に従って、man という語を使っています。それを聞いた友人たちは、man を男という意味にとって、薄ら笑いをするので、ハムレットはすかさず、「いや、女も面白くない」とたたみかけます。私が女性が面白い、と申しまして、ハムレットの悩みなど想像もできない心ない友人たちが興味本位に反応した「女が面白い」という意味ではありません。私が神戸女学院大学で過ごした20年余りは偶然でしょうか、フェミニズムの台頭・定着の時代でもあります。アメリカの女性運動の中心的指導者ベッティ・フリーダンの『女らしさの神話』原題では *The Feminine Mystique* が出たのが1963年です。日本語では『新しい女性の創造』と題されて1965年に出版されました。この書物は一読すべきであると教室でも紹介しました。シェイクスピアをめぐるフェミニスト批評の先駆けとなり今日も読みごたえがあるジュリエット・デュシンベリーの *Shakespeare and the Nature of Women* が出たのは1975年であります(邦訳『シェイクスピアの女性像、1994』)。昨年はその第2版も出ました。

このような書物を読んだ人間がシェイクスピアの女たちと言いましても、作者の女関係を取り上げようとは思いません。その上、そういった週刊誌やテレビがセンセーショナルに扱うスキャンダラスな話よりは、シェイクスピアの作品のほうがはるかに面白い。それは比較になりません。さらに言えば、シェイクスピアの私生活、実生活についてはほとんど分からない。彼は18歳のとき8つも年上の女性と結婚して、挙式6カ月あとに父親になっています。天才の子どもは6カ月で月満ちて生まれることもあるのだ、などと教室では適当に話していますが、結婚、それに続く長子誕生の事実はちゃんと公式の記録に残っています。シェイクスピアは遺言状に「2番目に上等のベッド the second best bed (the best bed ではなくてですよ) を妻に残す」と書き残したりしていることもあって、この姉さん女房との関係はそれなりに興味をひくものがあり、その話をしばらくやってみたい誘惑も覚えますが、この誘惑には負けないことにします。

2

イギリス王政復古期の詩人ジョン・ドライデンは、シェイクスピアは「もっとも大きくかつ包括的な魂 the largest and most comprehensive soul」の持ち主であったと称えています。ワーズワスと並ぶロマン派の詩人 S. T. コールリッジは「無数の魂 myriad-minded」の作家、

坪内逍遙の訳では『千魂万魄』、つまり千万の魂をもった作家であったと感嘆しています。ですから、シェイクスピアのペンによって造形された女たちはまことに多種多様、ヴァリエエティにとんでいます。社会的な地位で分ければ、王女、王妃から貴族、中産階級、労働者、奉公人、売春婦というぐあいに、すべての地位身分の女性が含まれます。また、他者、とくに男性との関係でみれば、娘、姉妹、妻、母、おばあさん、恋人、未亡人といった区分けのできる女たちがいます。粗野な田舎女がきいきい声をあげれば、都会の洗練された淑女も優雅にお出ましになる。バカ女もおおれば才媛もいる。尻軽の浮気女も、何の迷いもなく実兄の命よりも自分の操を大事にする修道女も、操を奪われて命を断つ貞女もいます。魔女だって出てきます。

地位、役割や外面ではなく、特徴的な女性像をもう少し見てみましょう。まず悲劇作品に登場する女たちはどうでしょうか。

周知のようにシェイクスピアの悲劇はすべて人名が題名になっています。しかも、ハムレット、オセローというふうに男性名です。悲劇10編のうち2編だけが女性の名前も題名に入っています。しかし、これも『ロミオとジュリエット』『アントニーとクレオパトラ』というふうに男性名と抱き合わせになっています。今あげた後の2つの作品は2人がペアになって主人公になっていますが、他はすべて題名になっている男が主人公であります。作品の題名だけを見ても、シェイクスピアの悲劇は男性中心であることが分かります。悲劇では女たちは主に犠牲になる存在として描かれているのです。

オフィーリアは互いに愛し合っている王子ハムレットに面と向かってさんざん悪口をを言われ、人違いによるためではあるがそのハムレットによって父を殺されて、自分も狂い死にする、男の犠牲になるか弱き柔順な乙女であります。もっとも、今月末に公開されるケネス・ブラナーが監督・脚色し、ハムレットを演じる映画を年末に試写会で一足先に見ましたが、オフィーリアは『タイタニック』のヒロインとしても評判のいいケイト・ウィンスレットが演じていて、このオフィーリアは活力に満ち行動力もある近代的女性になっていました。しかしそれでも犠牲になる女であることに変わりはありません。今年いただいた年賀状のなかで、卒業生の数人がブラナーの『ハムレット』に期待しているということを添え書きしてありました。私のつたない授業が、受講した皆さんをシェイクスピア嫌いにするという罪悪を犯してはいないか寝覚めが悪い思いをしたりしますので、このようなお便りに接しますと大いに慰められます。ブラナーの映画はおすすめです。

ちょっと話がそれましたが、オセローの妻デズデモーナも犠牲になる女であります。デズデモーナはヴェニス元老の深窓の令嬢であります。親には秘密に、愛する黒人であるお雇い將軍オセローと結婚いたします。釣書を冷静に検討しては到底好ましいとは思えない結婚です。デズデモーナはオセローに対して絶対的な愛をもって尽くします。その結果が、オセローがとんだ食わせ者のイアゴーという名の部下に騙されて、愛する夫によって殺されることになるのであります。愛している恋人を死に至らしめ、妻を殺害する——ここにシェイクスピアの悲劇的ヴィジョンをかいま見る思いをします。

リア王の末娘コーデリアはどうでしょうか。私利私欲の塊のような2人の姉とは対極的に、

コーデリアは徹頭徹尾、無私無欲の孝行娘、王女であります。父親に似て少し頑固なところはあるが、心やさしい潔癖な少女です。王国を3分の1もらうどころか、勘当されて無一文になるコーデリアのことを「姫ご自身こそ宝 (dowry)」と認識する求婚者のひとりのせりふが至言に聞こえます。私はこの学園でコーデリアのような学生に会う幸運に何度も恵まれました。つまらない自分の心が洗い清められる思いをしたものです。またそのたびに、シェイクスピアの悲劇的ヴィジョンがあくまでも虚構、フィクションであって、神戸女学院の学生の現実とはなんら関係のない絵空事であるよう願わずにはいられませんでした。コーデリアも殺されません。オフィーリアやデズデモナのように愛し愛される男によって殺されるではありません。しかし、コーデリア絞殺に至る悲劇の発端になるのは、これまた彼女が愛し、彼女を愛する父親のあまりにも愚かな行為なのであります。

悲劇作品には、マクベス夫人のように過剰な上昇志向をもつ女性もいます。強い決断力と意志をもって彼女は夫を王位につけるのに成功します。そのためには手段を選ばません。マクベス夫人程ではなくても、その系譜を引くのではないかと思わせる女性は今日の日本にも珍しくはないようです。もっともその多くは亭主にはほぼ諦めて、野心を子供に向けて尻をたたいて勉強させる。コリオレイナスの母親は息子を有能で名誉に輝くが人間味のない将軍に育て上げますが、この母親もマクベス夫人の親戚であります。

先に題名の一部としてあげたクレオパトラは複雑で単純化するのには誤解を招きかねません。そのことを承知の上で、反論できないクレオパトラの特徴的な面といえば、彼女は美貌と官能の罠で男を誘惑し陥落させる最高に妖艶な女であるということでもあります。このような女に心を奪われて、有能な将軍アントニーはローマを失うが惜しいとは思わない。ふたりは死に至ります。シェイクスピアの「失樂園」ですね。しかし、官能的悦楽から出発したふたりの愛と死が犬死のような死ではなく、むしろ愛欲がその官能性をとおしていき高き精神の超越性まで昇華している、と理解することも可能にする女性であります。『アントニーとクレオパトラ』は悲劇には違いありませんが、その作品の精神は続いて書かれるロマンス劇、つまり「最後の作品群」とも称される4つの悲喜劇に近くなるのであります。ロマンス劇は大きくは喜劇のジャンルに入ります。

3

シェイクスピアの悲劇の世界は男を中心とするが、喜劇に主人公があるとすればそれは女であります。

喜劇の世界には、『空騒ぎ』のビアトリスのように頭脳明晰、才気煥発で魅力あふれる女がいます。『空騒ぎ』は先にふれた映画『ハムレット』を作ったブレナーが当時妻であったエマ・トムソンをビアトリスにして共演した映画にもなったので、ご覧になった方も多いのではないかと思います。ビアトリスは、美しい女性の激しい怒りが、悪の跋扈を許さない義憤となるときに、微笑みに劣らぬ美しさと魅力になりうる、怒りの美学とでも称したい、こわいがひとを魅了する顔もみせます。いつもそんな顔をされたら堪ったものではありませんが、アン・アン、

ノンノと浮かれる女たちにも見てほしい顔であります。『十二夜』のヴァイオラはどうでしょうか。ヴァイオレット（スマイル）の花のように可憐な色香をたたえるヴァイオラは夏目漱石もお気に入りだった女性で、控えめでしとやかだけれども活力を秘めた^{しん}心の強い、今日でも珍しくはない女学院の学生を思わせます。この女性は、マクベス夫人とは逆に、愛する人のためには自分の気持ちを押さえに押さえてひたすら尽くします。彼女の愛は、結局は成就します。ヴァイオラは変装してジレンマに陥りますが、『お気に召すまま』のロザリンドは必要に迫られて変装をしても、変装は彼女を自由闊達にします。ロザリンドもビアトリスと同じようにさめた女で、頭がよい点も似ていますが、素直で明るく才覚もあり、多くの女学院の学生諸君に似たところがあります。シェイクスピアが好意的に描く女性の多くは本学の学生とよく重なり合います。ロザリンドは、イギリスの華やかな花ローズのような女性ですが、彼女は結婚をバラ色一色にするような幻想に足をすくわれる心配もなく、好きになった男性と結ばれて、作品は「お気に召すまま」に終わります。

シェイクスピアの喜劇はいく組かの結婚の成立をもって終わります。結婚は秩序と調和の喜び、豊饒の期待を象徴するものでありますが、その結婚を複数化、集合化することによって、当事者にとってもっとも私的な人間関係の社会性を強調し、共同体、社会そのものの秩序・調和と豊饒を祈願するものにしています。ですから、結婚の慶事は、友人や肉親との関係にひびを入れるのではなく、むしろいっそう強め固めるものとして表されます。話はまた少しずれますが、昨人気を博した女性デュエットの名前はPで始まるそうですね——ザ・ビーナッツ、ピンクレディ、パフィーといった具合に。パフィーのほうは一昨年ゼミ合宿をしたときに学生のひとりに教えてもらい、私にしては珍しく名前も覚えています。告白しますと、顔は覚えていません。もっともパフィーという名前は、私どもが京都に住んでいたころ、まだ小さかった息子たちが大事にしていた子猫の名前でもありました。それはともかく、偶然ですが、シェイクスピアもPで始まる登場人物の女性が好きだったようです。ご存じ『ヴェニスの商人』のポーシア、日本ではそれほど有名にはなっていないが、ロマンス劇の傑作『冬物語』のボライナの2人です。パフィーのようにデュエットが歌えるペアになるかどうか知りませんが、この2人については少し詳しく話をしてみたいと思います。

話の筋が私事であまりそれではいけませんが、『ヴェニスの商人』についてはちょっと脱線をお許し下さい。この喜劇、正確にはその抜粋は私が最初に読んだシェイクスピアの文章であります。もちろん、翻訳です。坪内逍遙の訳文とあっていて、今度確かめるため、逍遙訳に当たってみたらどうも違うようで、多分、1939年（昭和14年）に出た中野好夫の古い訳だったと思います。敗戦後3、4年目ぐらいだったでしょうか、米軍占領下の沖縄では、教室は生徒の私たちが建てたトタン屋根の堀っ建て小屋でした。そんな教室で初めて手にした日本本土の高等学校の国語の教科書に載っていました。数名に1冊しか配られていませんが、何年ぶりかで手にした、活版刷りのちゃんと製本された教科書でした。その教科書に第4幕第1場のポーシアが慈悲を説くあの有名な箇所が載っていました。

慈悲というものはな、強制されるべきものではない。
慈雨が天から注いで、この大地を潤すようにだな、
まさにそうあるべきもの。祝福は二重にある。慈悲は、
まず与える者を祝福し、また受ける者をも祝福する。

(中野好夫 訳、4 幕 1 場)

引用は1973年の改版された岩波文庫判からです。別段難しい訳文でもないのに、戦中・戦後、勉強とは縁のなかった沖縄の高校生にはよく分かりませんでした。でも、何の望みもなく索漠とした毎日を過ごしていた私にも、文体の調子のよさと新鮮なメッセージは、記憶の片隅に残りました。

この名前がPで始まるポーシアはきれいな人、プリティ・ウーマンであります。美しいのは容姿だけでなく、気立てもよく、心も美しい。その上に、この才色兼備の女性はベルモントと呼ばれる、名称からしておとぎの国のような所に巨万の遺産を相続している。ですから、彼女には何不自由もなく悩みもないように思われますが、悩みはやはりあります。この見目麗しく才長けた富豪の貴婦人は、求婚者が世界中から押し寄せるが、結婚相手は亡くなった父親の遺言によって三つの小箱を選んで決めなければならない。つまり、今日いうところの本人の自主的判断とか気持ちが必ずしも尊重されない状況にある——「生きている娘の意志が死んだ父親の遺志で縛られている。ひどいと思わない？ 誰も選べないし誰もことわれないなんて」(1 幕 1 場)、とこのように嘆いています。この問題は、悲劇であればまさに悲劇的な破局へと進展する深刻な問題になりますが、喜劇ではうまく当人と観客のお気に召すように収拾されます。

しかし、『ヴェニスの商人』でポーシアらしいところをもっとも強く印象づけるのは婿選びではありません。ポーシアを愛し、彼女に愛されるバッサニオという青年はお金もなく知恵もそうありません。この青年は求婚資金を友人のアントニオから借ります。その借金のためにアントニオは高利貸のシャイロックによっていわば合法的に殺される羽目に陥るわけです。結婚相手の親友の苦境を救うポーシアが燦然と輝きます。

ポーシアが法律家としてヴェニスの法廷に乗り込むには男に変装しなければなりません。昨年の司法試験でも女性の合格者が増えて、日本では判事や検事あるいは弁護士として女性がますます活躍するようになりますが、シェイクスピアの時代には女の裁判官なんて考えられませんでした。時代といえ、シャイロックについても、今日では一概に悪人呼ばわりするのは抵抗があります。彼を悲劇的犠牲者にする解釈もあります。特にナチによるユダヤ人の大虐殺——ホロコーストですね——以後反ユダヤの言論は言うまでもなく、反ユダヤ的と見なされる言辞も許されません。そのことを弁えた上で言うのですが、シェイクスピアの喜劇では、シャイロックは同情の余地もあるがやはり悪党として表されていて、その畏にはまった善良なキリスト教徒の商人を救うのがポーシアであります。

法廷における息を飲むようなやりとりを、時間の関係でお話しできないのは残念ですが、美しく心やさしきポーシアはその才覚を用いて夫となるべき人の善良な親友の命を救い、貪欲か

つ冷酷なシャイロックを退治いたします。ポーシアの鮮やかなどんでん返しの勝利について、ポーシア役で名声を高め、20世紀の初めまでシェイクスピアの名女優として謳われたエレン・テリーは、次のように述べています。契約書と法律を楯にとって一步も譲らないシャイロックを前にして、絶望的なピンチに陥った瞬間に、ポーシアには知恵がひらめいたのだ、と。人を救うために必死になる心やさしき者にはインスピレーションが与えられる、ということでしょうか。女性の魅力は社会的に有益なことをする、世の中で役に立つ、ということと何の矛盾もないばかりか、妻としてもいっそう魅力を増し美しく輝くことを示しているのです。ポーシアのように公爵ご臨席の法廷で華々しく行わなくても、たとえ小さな限られた範囲のなかでも、何か周囲の人の役に立つようなことをしても同様ではないでしょうか。

昨年は『ひ弱な男とフワフワした女の国日本』という本がベスト・セラーになり、「このごろの男めっきり弱くなり」とかともあざけられて、男の端くれとして^{くじけ}忸怩たるものを覚えますが、ポーシアは決してフワフワした女ではありません。まわりの男たちと比べてもはるかに立派で、女の時代を先取りした人物ではないかと思わせるものがあります。ポーシアは男どもを出し抜く知恵才覚を発揮するわけですが、それは威張るためではなく、人を助けることを目的にしています。権力をもつ男たち、世の知者たちにできないことをやってのけています。この元氣印の、気骨があり勇氣とユーモアにあふれる女性に、フェミニストであろうとなかろうと、拍手をしたくなるの当然ではありませんか。『ヴェニスの商人』はポーシアを軸にして動くと言っても過言ではありません。

4

私の通常の授業と同じで、どうも時間が残り少なくなってきたようですから、少し急がせていただきます。くじ運が悪くて私のクラスを取る羽目になった学生の皆さんは最終講義でも同じボロを出していると思っているでしょうが、すみません。

シェイクスピアのラスト・プレイズ「最後の作品群」のひとつ『冬物語』を取り上げたいと思います。

『冬物語』は、題名が示唆するように、おとぎ話のような雰囲気が始まります。立派な王様として敬愛されているレオンテスという名前の王が、ある日突如として嫉妬に狂います。悲劇『オセロー』では悪党イアゴーが冷静沈着な主人公を狂わせますが、『冬物語』ではそんな悪党は存在しません。王妃ハーマイオニの不倫の相手と決めつけられるのは王の竹馬の友として長年親しんできた親友なのです。男の狂気の沙汰は家庭も友情もぶち壊す。ハムレットがオフィーリアを売女扱いしたように、レオンテス王はハーマイオニを口汚くののしり、生まれたばかりの自分の女の赤ちゃんを不倫の落とし子として、人里離れた所に捨てさせます。可愛く育てていた王子も死んでしまいます。王子のあとを追うかのように王妃も死んだという悲報がもたらされます。

権力者の狂気の嫉妬に対して立ちはだかり、戒めるのがやはり女性、ハーマイオニの侍女、その名前がPで始まるポーライナであります。リア王に諫言を呈する忠臣ケントが女に生まれ

変わったような女性ですが、与えるインパクトはケント以上に強大です。王妃の貞節を信じ、ポーライナはときに礼儀を忘れても、言うべきことをはっきりと、ずけずけと言ってのけます。「ことばがのろいのが女の唯一のとりえ」——これは『ヴェローナの二紳士』のなかでシェイクスピアがある人物に言わせるせりふであるが、ポーライナは雄弁であります。荒れ狂う権力者の前で忘れるのは礼儀だけではない。ポーライナは文字どおり我が身も忘れて王妃の名誉を守ろうとします。王の命令に従って妻を押さえつけようとする夫にも反抗します。妻は夫に従い、夫は神のみに従う（“He for God only, shee for God in him”）、とミルトンは『失樂園』（これは本物の『失樂園』です）で伝統的な夫婦の関係を肯定的に記しましたが、ポーライナが従うのは、事によっては夫や王ではなくて、神のみ、良心のみであります。王が下した国の法律を超越する自然法、人間性がある、と命を賭した古典ギリシア劇ソポクレスのアンティゴネーを思い出させる女性です。

忘れてはならないのは、ポーライナには誠意に基づく勇気があるだけでなく、知恵もあり行動力も備わっているということです。先程、無実の罪を着せられて王妃も死んだ、というようなことを申しました。シェイクスピアの戯曲では珍しく、舞台上の登場人物だけでなく、それを観ている観客も王妃は死んだと信じこまされます。しかし、実際には王妃は死んではいなくて、16年もの長い間、ポーライナが匿うのです。その間、妻子を犠牲にし、親友を失った王レオンティーズは悲嘆と悔恨の日々を送っています。16年にわたる暗く長い冬のような試練の歳月は、同時によみがえりの春を準備する必要にして貴重な時間でもあります。不貞の子として捨てられた王女は羊飼いに拾われて、16歳の花の乙女に育っています。しかも本人も周囲の人たちも王女とは知らないまま、王妃の不義の相手として殺してやろうとした親友であったシリリアの王ポリクシニーズの王子さまと恋仲になっているのです。父王の狂乱によってもたらされた長い冬のあと、ようやく春が訪れるのです。

理不尽な嫉妬によって裂かれたかつての親友の息子と王女が仲よくなって、今や生まれ変わった父親、すなわちレオンティーズ王の祝福を得ようとやって参ります。失われた娘が立派に成長して戻ってくる。しかも断絶したかつての親友の息子と結ばれて。親子はこのような形で再会し、壊れた友情も回復され、しかもかつての友人とは友情の絆を結び直すだけでなく、縁戚となります。

このめでたいときに、一同は亡き王妃ハーマイオニを記念した立像を見ることになります。作り物とは思えないほど、ハーマイオニそっくりの立像に皆感心します。この立像は、16年も経過して、美しい顔にはしわまできざまれたハーマイオニその人の立ち姿であることがしだいに明らかにされます。ここは大変に感動的なシーンで、鈍感な私でもハーマイオニ再生とでもいえるこの瞬間には涙を禁じ得ません。苦しみに耐え抜いた女、その16年の歳月が顔のしわに歴然と刻まれています。

すこし長々と作品の展開を説明しました。長い冬のあとの一族再会、和解、再生——これが『冬物語』のテーマなのでありますが、このようなめでたきファイナーレを可能にするのがポーライナなのであります。ほかの多くの作品同様に『冬物語』には種本がありますが、ポーライ

ナはシェイクスピアの創作であります。大学院のある学生がポーライナのことを修正する人間である、と言っていたのを覚えています。絶えず何らかの修正を施さなければならないのが人生というものです。ポーライナこそ脇役ではあるが、かけがえのない大切な人物であります。この脇役は、悲劇を喜劇に転換させるのに与かる重要な人物なのであります。

悲劇的現実を喜劇的ヴィジョンへと修正するには人間の知恵や力をこえた絶対者の恵み、恩寵を必要とするかもしれません。しかし、そのような恩寵を現実の実体あるものにするのがポーライナなのであります。人生のありとあらゆる悪、運命といって受け止めるにはあまりにも不条理きわまりない絶望的な現実、そのような暗黒面を凝視してえぐり出したシェイクスピアであります。いや、そうであるからこそと言うべきかも知れませんが、シェイクスピアは最後の作品の一群に悲しい悲劇を喜びの喜劇へと逆転させるテーマを表現したのあります。そのテーマを実体化するのが女性なのであります。

『冬物語』は悲劇的現実を喜劇的ハッピーエンドへと転換するのに季節の推移と同調させています。冬のあとに春がくるのです。自然の移り変わりは必然です。しかし、悲しい現実が喜びへと転化するのには必然ではありません。この必然ではない困難な業を実現する——これはシェイクスピアの祈りであり、また万人の願いでもありましょう。シェイクスピアにとってこの祈り、願いを現実のものとするのが女性なのであります。

母親の早すぎた再婚に衝撃を受けたハムレットは「弱き者よ、汝の名は女なり」と言って、女性全体に一般化して、女性の精神的な弱さ、倫理性の欠如を嘆きますが、これは若いハムレットの嘆きであって、必ずしも作者の認識ではありません。シェイクスピアの喜劇の女たちは強いのです。

われわれは皆女の腹から生まれています。生命をいとおしみ、命あるものの幸せを願う本能は女性により強く宿るのかも知れません。ゲーテの『ファウスト』を締めくくる2行にもあるとおり、「永遠の女性、われらを高みへ引きゆく」のであります。手塚富雄が「永遠の女性」と訳したところは、私が学生のときに読んだ英語版では“The Woman-soul”となっていて、女性的な精神・魂がわれらを上昇・向上させる力となるというのであります。多くの皆さんが「英文学史」（あの「インリタ」ですね）で読んだクリストファー・マーローの、欲望のために魂を売った神学者ファウスタス博士は救われませんが、ゲーテの主人公は女性グレートヘンに導かれて救済されます。

5

神戸女学院の学生たちについて特に語る時間はなさそうです。岡田山ですばらしい学生たちに恵まれる私の幸福にも終止符が打たれようとしています。人生の有限性を思うのも、このごろしきりです。個体の存在には限りがあります。しかし、個体の終焉を超えてその個体が属する、あるいは深くかかわる共同体の存続・繁栄は可能であります。新しい世代に夢を託すことは許されるはずで。

シェイクスピアの女たちが私なりにいくらか理解できたのも、春をもたらす皆さんにたくさ

ん巡り会うことができたからでもあると思うのです。必ずしもポーシアのように名裁判官にならなくてもよい。『冬物語』と並ぶ最後の傑作でやはり人生の春をもたらす『あらし』の王女ミランダのように、王子さまと結婚して強大国の王妃に収まらなくてもよい。ポーライナのように王家を動かすほどの力はなく結構。ただ、このような明るく聡明で平和をもたらす学生たちが、これからもこのすばらしい学び舎から続々と巣立ってほしいと願っています。「一隅を照らす」という言葉があります。たとえ与えられた一隅が小さな家庭、職場、あるいは隣近所だけであっても、それを照らし続ける皆さんであることを祈っています。

私は直接お祈りを捧げることはありませんが、文学作品を読んでも、人の話を聞いても、そもそももちろん祈禱の場に居合せるときも、心のなかで唱和することがあります。私が出会った祈りのなかでも強い共感を覚え、教室で紹介したこともある祈りがあります。アメリカの神学者ラインホルト・ニーバーの祈りです。この祈りを覚えてくれただけでなく、ヨーロッパの旅先でそれが記されたタブレットを見つけて、お土産にもってきてくれた学生もいました。こうして私は座右の銘を研究室の机の目立たない場所ですが、そこに目の銘として安置しています。これがそのタブレットであります[提示]。有名になっている祈りですのご存じの方も多いでしょうが、またふさわしい日本語訳もあるでしょうが、念のため私の下手な訳もつけてプリントをしていただいているのでお手元に届いていると思います。

O God, give us

Serenity to accept what cannot be changed,

Courage to change what should be changed,

And Wisdom to distinguish the one from the other.

1934, Reinhold Niebuhr (1892-1971)

神よわれらに与えたまえ

変えることのできないものを受け入れる安らかな心を、

変えなければならないものを変える勇気を、

そしてこのふたつを識別する知恵を。

1934, ラインホルト・ニーバー (1892-1971)

まとまりのないつたない話を最後までご清聴ありがとうございました。

(時間の関係で省いた部分も復元した)

(原稿受理1998年4月17日)